

# 道徳教育におけるメディア

—カントの「実例」概念をめぐる—

基礎教育学コース 土 屋 創

Medium in Moral Education: Focusing on the Concept of 'Example' in Kant's Moral Theory

Hajime TSUCHIYA

This paper tries to make sense of the concept of 'example (Beispiel)' in Kant's moral theory and to demonstrate the meaning of the concept as a medium in Kant's conception of moral education. This concept appears in Kant's major writings and in particular Kant uses examples as the method of making objectively practical reason also subjectively practical. In this context this paper will reconsider Kant's moral education by examples and its structure, exploring the role that an example plays in Kant's argument about the practical principle, and examining the relation between 'example' and the term 'archetype (Urbild)'.

## 目 次

はじめに

1. 否定的媒介項としての「実例」
2. 道徳性の陶冶における「実例」
3. 「実例」と「原像」

おわりに

はじめに

本稿の目的は、カント (Kant, Immanuel, 1724-1804) の論じる道徳性の陶冶における「実例 (Beispiel, example)」概念の分析を通じて、所謂「道徳教育」の文脈における「実例」の意味について考察することにある。現代の学校教育において、子どもに何らかの具体的な人物や具体的場面、具体的事例を提示し、子どもが「道徳」について考えるきっかけを与えるというアプローチは——子どもの年齢などの諸条件によって多様な形態が考えられ、またその授業内容にも豊富なヴァリエーションが見られるが——一般に広く知られており、また実践されていると言える。たとえば、子どもにとって身近な人物——家族や友人といったような——を一つの考察の手がかりとして、「どのような振舞いを“道徳的”と感じるか (あるいは、感じたか)」、「その振舞いはどのような点で“道徳的”と考えられるか」、「“道徳的”な行為とはどのようなものか」といった問いについて子どもが自ら考える場を設けるというような試み、あるいは、ある歴史上の人物を取り上げ、

「どのような行為や判断、または考え方に“道徳的なもの”を見出すことができるか」といった点について深く掘り下げる機会を子どもに与えるといった試みなどが考えられるだろう。このように「道徳 (性)」をめぐる問いに子どもが自らアプローチするための契機として「実例」を挙げることは、今日の「道徳教育」において目新しい試みではない。

しかし、「なぜそのような試みが子どもの道徳 (性) に寄与すると言えるのか」と問うとき、そこには「道徳教育」に付随するある種の特有の困難が横たわっているということも否定し難いことのように思われる。確かに、上に示したような問いに対して個人的な体験や数多くの経験的事実に基づいて応答することは可能であるかもしれない。しかし、それに対して客観的な「答え」を与えることは不可能であると言わざるを得ない。「子どもの道徳性に寄与」しているという事態を所謂「自然科学」のように直接観察し、それを——たとえば数式のように——客観化して記述することは教師にも当事者である子ども自身にも到底要求できるものではない。しかし、人間の「内」で起こっていると思われるこのような事態を直接記述することは不可能であると仮定しても、むしろそうであるがゆえに、それへの説明や解釈を与えようとする試みが積み重ねられてきているということもまた否定できない事実であるように思われる。本稿では、このような説明を試みた一つの事例としてカントの道徳思想をめぐる議論を取り上げ、「実例」による「道徳教育」の意味を考察

してみたいのである。

これまで、カントの「道徳教育」論は、強制と自由の両立可能性に関する問題<sup>1)</sup>、カントの教育理論全体の体系に関する問題<sup>2)</sup>、「善意志 (guter Wille)」を基盤とした「純粋実践理性の方法論」理解の問題<sup>3)</sup>など、様々な角度から着目されてきている。このことは、カントの用いた「道徳」概念自体が多様な議論を内包しているという点のみならず、同時にその議論が広大な問題圏を提示するものであるということにも由来していると言えるだろう。そして、本稿の分析対象である「実例」概念も、カントの「道徳教育」論の文脈において重要な視角を提起していると言える。たとえば、ガイヤーは、子どもに道徳に関わる思考を促す「仮説的実例 (hypothetical example)」や、子どもが道徳性の原理を人間本性の限界という条件に即して受け入れるための「歴史的実例 (historical example)」といった概念を提示し、道徳的陶冶における「実例」の位相に関してカントの議論の具体的な文脈に即した区分設定を試みるとともに、その役割の重要性について論じている<sup>4)</sup>。また、山口も、ガイヤーの議論を体系的に再解釈しながら、それにとどまることなく、教師による「実例」の適切な選択や提示についての方法論を分析的に考察し、その帰結として、「実例」による子どもの判断力の涵養という課題を新たに議論すべき論点として提起している<sup>5)</sup>。本稿は、このような先行研究を土台としながらも、「実例」が「メディア」として果たす役割を検討しつつ、さらに『たんなる理性の限界内の宗教』(1793, 1794)〔以下、『宗教論』と略記〕をも考察の対象とし、「実例」論が有する土台を再考しようと試みるものである。

以上のような課題設定のもと、次のような段階を踏んで議論を展開する。まず第1章においては、カントにとっての「実例」が道徳性の原理へと議論を進めるプロセスにおける否定的媒介項として機能している事情を明らかにする。カントは『実践理性批判』(1788)などの諸著作において「実例」による「道徳教育」の可能性を論じているが、これは道徳性の「実例」なるものに従うことによって、子どもの道徳性が養われるといった議論の枠組みとは区別される必要がある。むしろ、カントはこのような「実例」の捉え方によっては人間の道徳性を説明することができないという立場に立っていたのであり、それゆえ「実例」は道徳性の基礎づけという文脈において否定的な媒介項として位置づけられ得るのである。次に、第2章では、「実例」と人間の道徳性との関わりを考察し、そのあり方につ

いて検討する。ここでは、カントが提示する具体的な「実例」を手がかりとして、「実例」というメディアにおける「道徳教育」の構造の一端を明らかにすることを試みる。その上で、第3章においては、『宗教論』を視野に入れ、カントにおける「実例」概念と「原像 (Urbild)」の理論およびその関係に着目する。ここでの中心的な課題は、カントが提示する道徳的完全性としての「原像」が「実例」論にどのような議論の広がりをもたらすかという点を明らかにすることである。道徳的完全性を備えた「原像」は、理性的存在者が自らの内に立てる「理想 (Ideal)」であるとともに、『実践理性批判』に登場する物語的実例などと関わり、道徳性の陶冶に力を与えるものである。このように、「原像」との関わりにおける「実例」論の可能性を議論の俎上に乗せることがここでの課題である。

## 1. 否定的媒介項としての「実例」

上述したように、この第1章での課題は、カントが道徳性の原理の確定へと議論を進める際に、「実例」が否定的媒介項として機能しているという点を示すことである。ここでは『人倫の形而上学の基礎づけ』(1785)〔以下、『基礎づけ』と略記〕におけるカントの議論を主な検討対象として、以上の点を明らかにすることを試みてみたい。

周知の通り、『基礎づけ』の目標は「道徳性の最上原理の探究と確定〔強調は原文〕」(IV 392)<sup>6)</sup>であり、その最上原理は「意志の自律」である。しかし、ここで着目するのはその論証過程である。同書の第2章においてカントが最初に行ったことは「実例」を模範として立てることの弊害について論じることであった。そして、この事実が、逆説的に「意志の自律」への道を拓いているのである。

『基礎づけ』の第1章において、カントは「義務に適っている行為」と「義務に基づく行為」を明確に区分し、前者を行為自体は義務に適合しているが自らの幸福を意図しそれを追求する傾向性と結びついている行為、後者を傾向性に支配されことなく、意志が道徳法則と直接に結びついている状態でなされた行為であると規定している<sup>7)</sup>。このような二種類の行為の区分のもと、第2章の冒頭において、道徳性および人倫性がア・プリオリな原理に基づいていることを論証するに際して、以下のように注意を促している。

もし私たちが人間の行状についての経験に注意を払

うなら、自分でもなるほどと思えるような当然の告発にしばしば気づく。つまり、純粋な義務に基づいて行為するという心構えについては、これこそ確実だと言えるような実例を全く何ひとつ挙げることができないのである。たとえ時には、義務が命じることと適合してなされる行状があるにしても、しかし、それが本当に義務に基づいてなされるのか、したがってまた、それが道徳的価値をもつのか、ということとは常に疑わしいのである。〔強調は原文〕(IV 406)

また、カントによれば、純粋な義務に基づいた行為か否かの判定が不確実になるのは、上記の引用部分で想定されているような他者の行為の「実例」についてのみではない。自分自身の行為に関しても、その格率の道徳性および人倫性について深く考えるならば、それらを確実なものとして断定することは決してできないとカントは言う。

事実、経験によるかぎり完全に確実にやり遂げるのがまったくもって不可能なことがある。それは、何はともあれ義務に適ってはいる行為の格率が、ただ道徳的根拠と自分の義務の表象のみに基づいていたという場合を、たった一つでも突き止めることである。なぜなら、私たちがどれほど厳しく自己吟味したとしても、義務の道徳的根拠以外に、善い行為をあれこれと大変な犠牲を払ってでもさせうる有力な運動根拠が、何一つ見当たらないときが確かにありはするけれども、だからと言って、自己愛の隠れた欲動力が意志を決定する本当の原因では全くなかった、義務の理念はただの見せかけでは全然なかったとは、実際のところ決して断定できないからである。(IV 407)<sup>8)</sup>

このカントの指摘は、他者の行為が義務に基づいている——つまり、道徳的価値をもつ——と判定できないというだけでなく、経験によるかぎり、意志を決定する際に隠れている欲動力の働きを否定できないがゆえに、自分自身の行為の格率についても、義務に基づいていると断定することは不可能であるという見解を提示するものと言える。そして、この点は道徳性の原理の存立とも密接に関係している。すなわち、経験によるかぎり、人間の行為が義務に基づいていたと判定することはできないのであり、この事実を——自己および他者の行為についての経験的な「実例」を——人

間の道徳性について考える際の立脚点として据えた場合、「人間が純粋な心構えで実際に行為することを断じて認めずに、どんな行為をも多かれ少なかれ洗練された自己愛のせいにする哲学者」や、「人倫性などというものはすべて単なる幻想であって、うぬぼれのせいで身の程を忘れた人間の想像が生み出したものに過ぎないとあざ笑う人々」の登場を許すこととなり、道徳性の原理の存在そのものを否定し去るような帰結へと至る道を用意してしまうのである (IV 406-407)。

このように、『基礎づけ』の第2章における「実例」をめぐる議論は、道徳性の原理を経験的なものとしてではなく、ア・プリオリなものとして考えなければならぬということを示そうとするカントの試みと密接に関係している。カントはどのような経験的な行為の「実例」であっても、それを吟味することを通して道徳性の原理に到達することはできないとする。それゆえ、ここでの「実例」には道徳性の原理の探究という観点から否定的評価が与えられていると言わざるを得ない。しかし、「実例」は単に否定的に扱われているのでもない。道徳性および人倫性の基盤についての議論において、表面上「実例」の位置づけは消極的であるが、道徳性の原理へと向かう論証過程であることを考慮するならば、ここでの「実例」の扱われ方は重要な意味を有していると言える。「実例」は、道徳性の原理を確定する方向へと議論を進めるための橋渡しとして確かに機能しており、「道徳性の原理の確定」に寄与する否定的媒介項として、その逆説的な構造のなかに組み込まれているのである。

## 2. 道徳性の陶冶における「実例」

前章では、『基礎づけ』におけるカントの議論を取り上げ、「実例」が、道徳性の原理の確定へと議論を進めるための否定的媒介項であるという点を確認した。ところで、カントが「実例」について論じているのは上記のような文脈においてのみではない。そこで、まず、そのような側面の一端を示す箇所として、『基礎づけ』の第3章の議論を参照したい。

誰であろうと、[……] ふだんでも理性を必要としているのであるから、そういう時に、意図における誠意や、善い格率を守り抜く毅然さや、同情心、普遍的な善意の実例を（さらにそのために利益も余暇も大いに犠牲にせざるをえないのを）見せつけられると、自分でもそのように心がけたいと願わないこ

とはない。[……]それゆえ、こうしてみると誰もが、感性の欲動力から自由な意志を具えていて、頭のみならず、感性の領野における自分の欲望の序列とは全く別の物事の序列へと、自分を置き換えていることを証明しているのである。(IV 454)

若干長い引用となったが、上述の箇所は、カントが「実例」に対して前章で見てきたものとは明らかに異なる視座を有していたということを示している。「誰であろうと」、「ふだんでも理性を必要としている」、「実例を[……]見せつけられる」という言葉から想定できるように、ここでもカントは、一般的な経験の観点を導入していると言える。しかし、その先にあるものは、ここでは「自由な意志」なのである。したがって「実例」は第1章で分析の対象としたような否定的媒介項という側面と同時に、道徳性の陶冶と関係するもう一つの側面を有しており、この点において、二つの意味を有していると言い得るのである。

では、このように「実例」に二つの側面を認めるとするならば、後者の「道徳性の陶冶と関係する側面」とは具体的にどのようなものなのであろうか。また、「実例」が人間の道徳性の陶冶に関わるとしても、それはどのようなプロセスにおいてなのであろうか。この点を次に検討しなければならない。そして、カントがこの問いに対する一つの応答を試みているのは、『実践理性批判』においてであると言えることができるように思われる。

『実践理性批判』の第2部「純粋実践理性の方法論」〔以下、「方法論」と略記〕において、カントは、「実例」を人間の道徳的陶冶の主要な方法として論じ、これにア・プリオリな道徳性の原理に基づいた道徳的陶冶の方法という位置づけを与えている。この「実例」は、実際にある人が生徒の眼前で何かを「実演」してみせるということでもなければ、生徒が自らの身体を通して「実習」するということでもない。あるいは、道徳的行為として示された「実例」をたんに「模倣」し、それを自らの習慣とするといったようなことを目標とするものでもない。カントは、「方法論」での課題を以下のように設定している。

この方法論にあっては、純粋実践理性の法則をいかにして人間の心へと導き入れ、心の格率に影響を与えることができるか、言い換えれば、客観的に実践的な理性をいかにして主観的にも実践的とすることができるか、という仕方を考えるのである。(V 151)

ここで言われている「純粋実践理性の法則」とは、あらゆる理性的存在者にとってのア・プリオリな原理である道徳法則のことである。そして、この法則を理性的存在者であると同時に感性的存在者でもある人間の心へと、いかにして「導き入れ<sup>9)</sup>」るかという点について、具体的描出を試みることをカントは宣言している。上述の引用部分にしたがえば、このプロセスは「客観的に実践的な理性を、主観的にも実践的とする」方法と言えるのであり、さらに言い換えるならば、これは「意志の自律」に基づいた「道徳的心構えの確立」とその陶冶の方法であると言えることができるだろう(V 153)。

このような文脈においてカントが提案する「方法」の一つが、「純粋な徳を提示すること」なのである。ここで言う「徳(Tugend)」とは、理性的存在者であると同時に感性的存在者でもある人間が直面せざるを得ない、傾向性などの感性的衝動との「闘い」、すなわち、感性的衝動の中で道徳法則に基づいた行為を断固として行おうとする際の「闘い」における道徳的心構えの強さを意味し、「意志の自律」に基づいて意志と道徳法則との完全な適合に向けて努力することを指している。カントによれば、このような「徳」の「実例」は、「満足やおよそ幸福に数えられるようなものの見栄えのよさから生じるあらゆる魅惑、あるいは、苦痛や禍いから生じるあらゆるおびやかしが惹き起こしうる効果」よりも「いっそうも大きな力」を持つのであり、これにより行為の適法性だけでなく、法則に対する純粋な尊敬から「道徳」法則を選ぶ強い決心もまた生じるのである(V 151-152)。このように、カントは「方法論」において、「純粋な徳」の「実例」が、人間の行為の適法性にのみならず、その行為における心構えの道徳性にまで影響力を持つという点を指摘し、「実例」が道徳的陶冶との関係において重要な意味を有することを示している<sup>10)</sup>。「純粋な徳」が提示されることによって、人間は傾向性や幸福と関係する動機から解放されるとともに、傾向性に依存していないという意味での「自由の意識」に気づき、実践的に首尾一貫した道徳的心構えを確立するきっかけを与えられるのである。では、「純粋な徳の実例」として、カントは具体的にどのようなものを想定していたのであろうか。この点について、カントの記述を参照しつつ、明示していきたい。

たとえば、『実践理性批判』の「方法論」においては、十歳の子どもに対して教師が「純粋な徳」の「実例」を示すという文脈で、「一人の誠実な人間の物語」が

登場する。この「物語」は、「ある者がこの人間を動かして、格別有力ではないが無実な人間（たとえばイギリスのヘンリー八世によって訴えられたアン・ブーリンのような）を誹謗する仲間に引き入れよう」とし、「立派な贈り物や高い地位のような利得」を提供しようとするが、これを「誠実な人間」が拒否するという記述から始まる（V155）。

上述ののち、この「誠実な人間」は、友人からの絶交を宣言され、近親者から相続権を奪うといった脅しをかけられるなど「損失」に関わる脅しをかけられるが、それにもかかわらず「動じるどころか疑いすらも抱かず、ひたすら誠実を尽くし抜く」のである（V156）。カントは、このような「実例」を教師が子どもに対して示すことで、子どもの心に変化が生じるとするとともに、このような子どもの変化に関連して、「徳」の実現に伴う「犠牲」について論じている。「徳」のもつ価値は、それによってもたらされる「利益」ではなく、その実現によって支払わなければならない「犠牲」によって決まるのであり、傾向性や幸福に数えられるようなものを「実例」において提示される行為の動機から取り除いていくことによって、子どももまた「自由の意識」に気づくようになるとカントは考えていたのである。

また、このような「実例」の他に、子どもの道徳的判断に関わる「実例」についても複数の言及箇所がある。たとえば、『人倫の形而上学』（1797）に登場する「道徳的問答法」においてカントは「実例」を用いて教師と子どもの対話の様子を描いている。これは、「たとえば、よくできた嘘言によって、君もしくは君の友人に多大な利益をもたらすことができ、しかもそのうえ、それによって実際だれも損害を被らないというような場合に直面して、君の理性は、それに対して何と言うだろうか」という教師の問いかけに対して、子どもが「私は嘘についてはなりません。[……]——この場合、私が従わねばならない理性の命令（あるいは禁止）は、無条件的」なものだと判断するものである（VI 481）。他にも、『理論と実践』（1793）<sup>11)</sup>におけるガルヴェへの反論過程の中で、カントは寄託物の着服の是非を子どもに問う場面を想定し、子どもが自ら道徳法則に基づいた道徳的判断を下す過程を描いている<sup>12)</sup>。

このように、カントは様々なものを「実例」の具体的内容として想定しており、「実例」が子どもの「自由の意識」や「道徳的判断」に積極的に関係していくという場面を描いているのである。

### 3. 「実例」と「原像」

前章では、「純粹な徳」の「実例」を示すことと子どもの道徳性の陶冶の関係をカントはどのように考えていたのかという点について確認するとともに、このような「実例」のあり方だけでなく、「道徳的判断」の「実例」についても、その概略を見てきた。「実例」は、子どもに他律的に影響を与えて「意志の自律」を損なうものではなく、子どもに「自由」を開示するとともに、道徳性の原理へと通ずる道を用意するものである。また、カントは、子どもの道徳的判断との関わりにおいても、「実例」を用いている。

しかし、このような「実例」の取り上げ方は、所謂「道徳教育」においては差し当たり特別なものであるとは思われない。また、そのみならず、一定の疑問を明るみに出しているとも言える。たとえば、前章で取り上げたように、「方法論」の議論においては、ある人物が傾向性などの感性的衝動と闘い、道徳法則と合致するよう力を尽くすという「実例」が挙げられているが、このように一人の人物における道徳法則との合致を示すことが、なぜ子どもの心に「影響」を与えることにつながるのか。また、そのような「影響」が生じうるか否かの規準となるべきものはどこに存しているのだろうか。さらに言えば、カントが子どもの道徳的判断を可能と見なす根拠はどこに存しているのだろうか。そして、このことについて議論を試みているということが、カントの「実例」論における最も重要な点の一つだと思われるのである。

では、道徳性の「実例」とその理解可能性について、また、「実例」と道徳的陶冶の関係について、カントはどのように考えていたのであろうか。ここで先に見通しを述べると、この点について、カントは「原像」の概念によって一つの説明を与えようとしていたと思われるのである。

まず、ここで着目すべき点は、「実例」を提示することの「限界」について、カントが明確に規定しているということである。カントは『基礎づけ』において以下のように論じている。

実例は、[……] 法則が命じることが実行可能であることを疑いないものにしてくれる。実践的規則がもっと普遍的に表現していることを、実例が一目瞭然とする。しかし、[……] 実例を範とする権限を実例は決して与えることができない。（IV 409）

ここでカントは、「実例」の有効範囲を厳しく限定している。確かに、「実例」は「〔道徳〕法則が命じること」が実際に行為可能であることを示し、「実践的規則」の表現内容を「一目瞭然」なものとする。そして、この点は、子どもの「自由の意識」への気づきと密接に関わっていると考えられる。しかしながら、「実例」はそれ自体として「〔模〕範」となるのではない——したがって、「実例」による「方法」においても、子どもは「実例」という「模範」に追従しているのではない。『純粋理性批判』（1781, 1787）においても、「実例」は、「理性の概念が要求することを、ある程度実行することができることの証明」であるにとどまり、基底的なレベルにおいて「作用」するものとは見なされていない（A 315/B 372）。では、このような基底的な層において人間の道徳性に「作用」するものとは何か。これについて、カントは「原像」および「原像」として役立つべき「理想」という概念を用いることによって説明を試みている。カントによれば、「理想」は「個体的な理念」であり、「人間理性はたんに理念を含むだけではなく、理想をも含んでおり、これらの理想は「……」ある種の行為の完全性の可能性の根底に存して〔強調は原文〕」いる。（A 568-569/B 596-597）。そして、この「理想」が「原像として役立つ」のである（A 569/B 597）。理性における「理想」は、「遵守のためであれ、判定のためであれ」、「原像として役立た」なければならず、この「原像」が「行為の尺度」、すなわち、人間が自分自身〔の行為〕を比較し、判定するための尺度となることによって、その人自身をより善くしていくのである（A 569-570/B 597-598）。また、『実践理性批判』においても、カントは「意志の神聖性」との関わりで「原像」についての議論を展開している。カントによれば、理性的ではあるが同時に感性的な動因などによって触発される存在者にとって、道徳法則に反する格率を何一つ受けつけないような意志は「神聖性（Heiligkeit）」を有すると考えられ、このような「意志の神聖性」が「原像」の役割を果たすとともに、この「原像」に「無限に接近することがあらゆる有限な理性的存在者にとってふさわしい唯一の事柄」なのである（V 32）。そして、カントはこの「原像」の概念を『宗教論』第2編において、以下のように発展的に扱っている。

道徳的完全性のこの理想にまで、言い換えれば一点の曇りなき道徳的心構えという原像にまで高まることは、人間の普遍的な義務であり、この理念

は、それを追究するように理性が私たちの前に置くわけであるが、理念そのものも、そこまで私たちが高まるように力を与えてくれることができるのである。しかし、この理念の創始者は私たちではなく、むしろ理念の方が私たちのうちに住むようになった「……」のである。〔強調は原文。〕（VI 61）<sup>14)</sup>

〔道徳的〕完全性を「理念」として考えることができるという論点は、『純粋理性批判』の「理想」論をはじめとした諸文脈においても見られる。人間は感性的衝動との闘いにおいて「徳」を実現しようとするが、道徳性の規準としての道徳的完全性は「理想」および「理念」として理性に存しているのである。しかし、『宗教論』における「原像」は、たんに規準を示すという位相にとどまるものではない。ここでの「原像」は、そのような道徳的な心構えにまで高まるという義務に対して、「力を与える」ものなのである。しかも、その「理念」は「神の心構え」（ibid.）であり、人間が創始したものではないにもかかわらず、われわれ自身の内にある。したがって、『宗教論』における「原像」は、カントの「道徳教育」論を根底で支えつつ、同時にその思考の臨界点の一つを示していると言えるのである。「原像」とは、「実例」を道徳的「実例」として見るができるようになることの根拠であると同時に、不断の努力によって漸近すべき対象であり、且つそのようになるべく力を与える理念なのである。

したがって、本章で扱ったカントの議論を踏まえるならば、「実例」による道徳的行為の可能性の提示が子どもの「自由の意識」と関わっており、この点で「実例」は子どもに「自由」への道筋を示す道標であり、媒介項である。また、「原像」および「原像」として役立つべき「理想」や「意志の神聖性」は、カントの「道徳教育」論の基底的位相に存しており、その議論の土台となっているとともに、カントにおける「道徳教育」の可能性そのものと関わっている。この「原像」という規準を欠いては「実例」における「道徳的判断」そのものが成り立たないため、「原像」は、「実例」による「道徳教育」が存立するための条件であるとも言える<sup>15)</sup>。このように、カントの「実例」概念は、「道徳教育」におけるメディアであると同時に、「道徳教育」をめぐる議論の基盤そのものの問い直しを迫るものでもあると言えるのである。

## おわりに

以上、これまで子どもの道徳性の陶冶における「実例」のメディアとしての役割とその実践の構造が孕む問題について、カントの議論を手がかりとして考察を試みた。本稿では、カントの「実例」概念は、道徳性の原理の探究においては「否定的媒介項」であり、また道徳性の陶冶をめぐる議論においても、一定の厳しい“範囲”つきの「権限」が与えられているのではないかという点を提起した。しかし、このことは、カントの「実例」概念と、それをめぐる「道徳性の陶冶」の議論が、「不毛な大地」であることを意味しない。むしろ、そこには、子どもの「自由」や「道徳的判断」がいかんして可能なのかという点について根本的に問い直しを迫る視座が存しているものであり、また、そのような問い直しからカントの議論を再考察することによって、「道徳教育」論の成立基盤そのものに臨むための一つの立ち位置を得ることができるのではないかとと思われるのである。そして、第3章で取り上げた「思考の臨界点」としての「原像」という視点について、歴史的文脈の中で考察を深めることが、今回残された大きな課題の一つである。

## 注

- 1) 鈴木宏 2009.「カントの教育思想にみる強制と自由との両立可能性」『教育哲学研究』第99号, pp. 63-82.
- 2) 大森一三 2013.「カント「教育論」における「道徳化」の意味とその射程—「理性の開化」と「世界市民的教育」の関係—」『教育哲学研究』第107号, pp. 79-96.
- 3) 中沢哲 2001.「カントにおける道徳教育方法論の思考法」『教育哲学研究』第83号, pp. 60-75.
- 4) Guyer, P. "Examples of Moral Possibility", in K. Roth and C. Surprenant (ed.), *Kant and Education – Interpretation and Commentary*: Routledge, 2012, pp. 124-138.
- 5) 山口匡 2013.「道徳教育における実例の問題性—ガイヤーのカント解釈に依拠して—」『愛知教育大学研究報告, 教育科学編』第62号, pp. 121-129.
- 6) カントの著作からの引用は、通例に従いアカデミー版カント全集(KGS)により、括弧内にローマ数字で巻数を、続けて頁数を示す。ただし、『純粋理性批判』だけは、第一版の表記をA、第二版の表記をBとし、その後に頁数を提示する。なお、翻訳は主として岩波書店版カント全集を参照している。
- 7) カントによれば、義務に関しては以下の三点が成り立つ。まず、「傾向性からではなくて義務に基づいて、自分の幸福を促進するべきである」という点、次に、「義務に基づく行為の道徳的価値は、行為によって達成されるはずの意図の中ではなく、行為が決心される際に従う格率の中にある〔強調は原文〕」という点、そして、

「義務とは、法則に対する尊敬に基づく行為の必然性である〔強調は原文〕」という点である (IV 399-400)。

- 8) ここで言われる欲動力は、経験における感覚的な快（あるいは不快）が行為の因となっているという事態と関わっており、カントの考える道徳性の原理に反するものと考えられる。
- 9) Eingang verschaffenの訳。山口は、この「導き入れ」という訳にふれ、「人間に他律的に働きかける」意味に解されてはならないという点に言及している。(山口, 前掲書 (2013))
- 10) 法則に対する尊敬 (Achtung fürs Gesetz) は、「法則の知性的原因に関してア prioriに認識される肯定的で積極的な感情」でもあり、「道徳法則が感情におよぼす間接的ではあるが積極的なはたらきの結果」であるともカントは言う (V 80)。また、ここでのカントの議論は、「自由の意識」への気づきと関わるものであり、所謂「教え込み」とは一線を画するという点に留意する必要がある。
- 11) 『理論では正しいかもしれないが実践の役には立たない、という通説について (Über den Gemeinspruch: Das mag in der Theorie richtig sein, taugt aber nicht für die Praxis)』を指す。
- 12) カントは、「道徳哲学はいささかなりとも人間に関する知識 (人間学) から借用することがなく、かえって理性的存在者としての人間にア・プリオリな法則を与える。もちろん、このア・プリオリな法則はさらに、経験によって錬磨された判断力を必要とする。それは、一つには、どのような場合にア・プリオリな法則が適用されるかを識別するためであり、もう一つには、ア・プリオリな法則を人間の意志に受け入れさせて実行へと促すためである。というのは、人間は、それ自身としては実に多くの傾向性に触発されるので、実践的純粋理性の理念を抱くことはできても、それほど簡単には、その理念を自分の生き方のうちで具体的に (in concreto) 活動させることができないからである」と論じ、経験を通じて道徳的判断力を磨くことの必要性を論じている (IV 389)。
- 13) カントは、「実例 (Beispiel)」を用いることについて賛同しているが、他者の行為を「模範 (Exempel)」として立ててそれに従うように子どもを指導することには異議を唱えている。「他者の行為」を用いる際の注意点として、「いかにあるべきかという理念 (人間性) との比較、つまり法則との比較こそが、教育にとって不可欠の規準を教師に提供するものでなければならない」とカントは論じている (VI 480)。
- 14) これに続けて、カントは「しかし、この理念の創始者は私たちではなく、むしろ理念の方が私たちのうちに住まうようになったのであり、しかも人間本性がこの理念に対して感受性を持ち得たことからして、私たちには理解できないわけだから、まさしくそれゆえに、かの原像は天から私たちのところに降りてこられた、それは人間性を受け入れられたのである、このように言った方が事態をいっそうよく表現できるのである〔強調は原文〕」(VI 61) とも論じている。
- 15) カントにおいては、『宗教論』をはじめとした諸著作を通じて、人間一人ひとりにおける最高善のみならず、共同体としての最高善の実現についての議論も展開されている。しかし、本稿の主題は「実例」による「一人ひとりの人間の道徳性の陶冶」にあるため、共同体論の文脈には立ち入らないこととし、今後の発展的議論の可能性を暗示するにとどめる。「人間において、理性の使用をめざす自然素質が完全に展開しうるのは、その類においてだけで

あつて個体においてではないだろう。……理性自身は本能によつて活動せず、少しずつ段階的に理解を深める目的でいろいろな試み、練習、教授を必要としている」とカントは言う（Ⅷ 18-19）。

（指導教員 田中智志教授）